

沖縄自動車道全線（那覇－許田間） 開通 30 周年を迎えて

西日本高速道路（株） 九州支社 総務企画部 企画調整課

はじめに

沖縄自動車道（那覇－許田間）は、昨年 10 月に全線開通して 30 年を迎えた。

NEXCO 西日本九州支社では、この 30 周年を機会として、これまで沖縄自動車道が果たしてきた役割・ストック効果を取りまとめ、特設ホームページなどを通じてお知らせするとともに、ご利用いただいた皆さまへの感謝を込めて、「うまんちゅ感謝キャンペーン」をサービスエリアやショッピングモールで行った（「うまんちゅ」とは沖縄ことばで「皆々さま」の意）。

これについては、地元放送局および地元紙などに取り上げられ、沖縄県内の多くの方々に広く PR することができた。

特に、昨年 11 月にイオンモール沖縄ライカムで開催した“うまんちゅ感謝デー”では、親子連れを中心とした累計来場者数が約 1 万人に達し、ストック効果展示パネルの展示コーナーや道路作業車両の体験コーナー等が賑わいを見せた（写真①）。

本稿では、沖縄自動車道がこれまで歩んできた歴史、沖縄自動車道がもたらしたストック効果について、概説する。



写真① うまんちゅ感謝デー

沖縄自動車道の整備の背景

第二次世界大戦後、米軍政下にあった沖縄は、昭和 47 年 5 月に本土復帰が実現したが、道路整備が大きく遅れていたのに加え、モータリゼーションの進展により交通事情が一層悪化していた。

そうした中、沖縄の本土復帰を記念する行事として「沖縄国際海洋博覧会」が昭和 50 年に開催されることが決定され、この開催にあたっての膨大な資材運搬や来場者の輸送に耐えうる高水準な道路整備が求められた。こうして昭和 47 年 9 月、「沖縄縦貫道路（名護－石川間）」の整備方針が閣議で了承され、ルート発表、米側の同意、事業許可を得て、昭和 48 年 6 月に全線起工し、博覧会開催前の昭和 50 年 5 月に異例のスピードで完成した。

その後、人口密度が高く、政治・経済活動の中心である沖縄本島南部の那覇市等と連結してこそ本来の目的にかなうとの考えから、石川から那覇に至る南部区間については「高速自動車国道 沖縄自動車道」として整備することとなり、昭和 54 年 3 月に旧道路公団が施行命令を受け、整備が進められた。また、北部区間（名護—石川間）は、昭和 61 年 2 月 4 日高速自動車国道法に基づく路線に取り込まれた。昭和 62 年 10 月 8 日、那覇—石川間の開通を以て沖縄自動車道は全線開通を迎え、人口が集中する南部地域と北部地域が連結されることで、ヒト・モノ・サービスの交流が一層促されるようになった（写真②）。

その後、昭和 63 年に屋嘉 IC が追加 IC として開通、平成 12 年 6 月 28 日には那覇空港自動車道（南風原南—西原 JCT 間（南風原道路））が一般有料道路として開通し、沖縄自動車道西原ジャンクションにおいて接続した。また、同時に ETC の試行運用が沖縄自動車道で開始された。平成 19 年には喜舎場スマートインターチェンジが社会実験を経て本格運用された。



写真② 那覇—石川 開通式

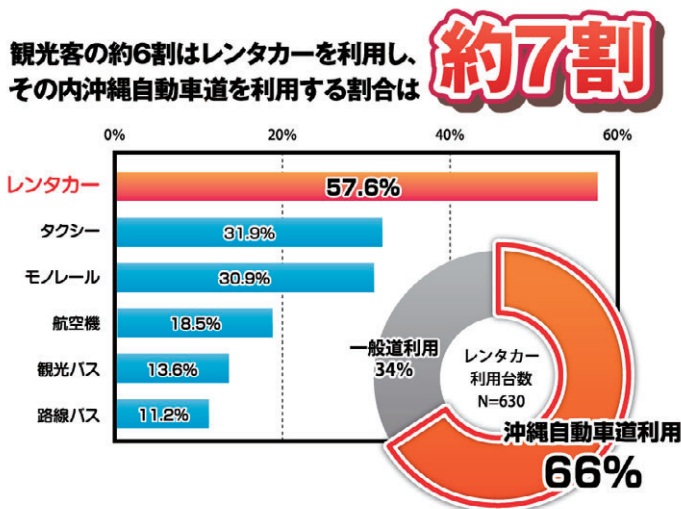
沖縄自動車道のストック効果

沖縄自動車道は、開通以来ヒト・モノ・サービスの交流といった経済活動に大きく寄与し、沖縄の暮らしを支えている。

昭和 62 年の全線開通以降、沖縄自動車道の利用台数は年々増加している。昭和 62 年度に約 4 百万台／年だった通行台数は、平成 28 年度には約 38 百万台／年にまで増加しており、この 30 年間で約 10 倍になった。また、沖縄県の人口は近年も増加しているが、この人口増加と沖縄自動車道の通行台数の増加には、強い正の相関があり、沖縄自動車道が地域の足となって利用されていることが伺える。さらに、平成 27 年に行った沖縄自動車道の利用目的調査では、通勤・通学に利用しているとの回答が 34% と、西日本平均の 20% と比べて非常に多くなっており、地域の足としての利用を裏付けている。

一方で、観光分野にも沖縄自動車道は寄与していると考えられる。従来の沖縄本島の観光地は首里や国際通りなどがある南部に集中していたが、沖縄自動車道の全線開通後、北部の観光地が増加した。また、沖縄を訪れた観光客数はこの 30 年間でおよそ 4 倍に増加している。そして、その観光客の約 6 割がレンタカーを利用しており、うち 7 割が沖縄自動車道を利用していることがわかっている（図①）。

さらに、北部の宿泊施設収容人数が約 3 倍に増加し、本島全域に占める割合が増えていることから、こうしたレンタカー観光客が沖縄自

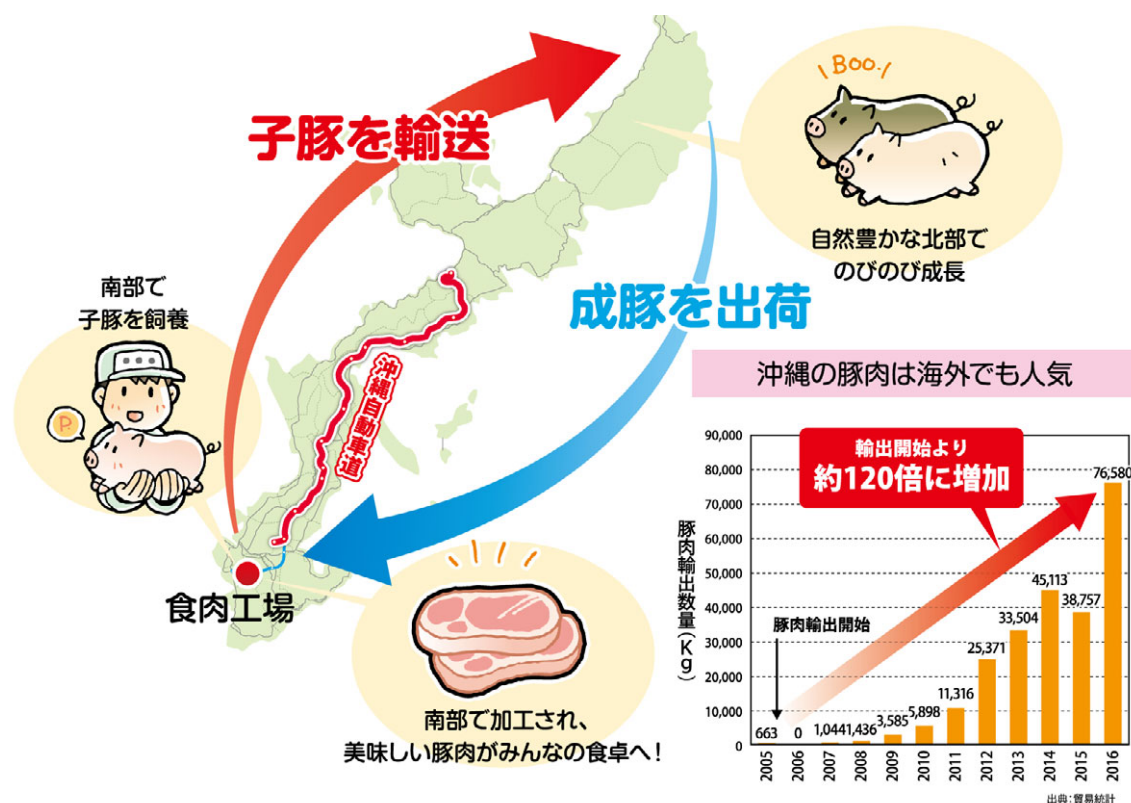


図① 観光客の利用交通手段と沖縄道の利用率

自動車道を利用し北部の様々な観光地へと足を伸ばすことができるようになったことで、観光エリアが広がったと考えられる。

農畜産業面では、沖縄県は、その温暖な気候を生かし、菊・マンゴー・パイナップル・さとうきび・アグー豚など、さまざまな特産品を有しており、そうした農畜産物の生産・出荷の場面でも沖縄自動車道は活用されている。

例えば、沖縄の特産品であるアグー豚は、国内のみならず海外への輸出も増加するなど、ブランド豚としての地位を確立し、知名度を高めている。このアグー豚の生産・出荷の過程において沖縄自動車道を利用することで、揺れが少なく短時間の輸送が可能になり、輸送や出荷の際にかかる豚のストレスを最小限に抑えることができるようになった。これにより、「南部で飼養した子豚を輸送→自然豊かな北部で飼養し成豚になれば南部へ出荷→南部で加工→各地へ配送」といった安定した品質の生産サイクルが構築されている（図②）。



図② 豚の生産サイクルと豚肉輸出数量の推移

終わりに

現在、南部区間で30年、先に供用した北部区間で42年が経過した沖縄自動車道は、橋梁を中心とした道路構造物の劣化が顕著になってきている。この抜本的対策として、会社は「高速道路リニューアルプロジェクト」と銘打った大規模な更新・修繕工事を、15年計画で実施している。本工事によって沖縄自動車道をより強靱にし、今後も道路機能を大いに発揮し続けることができるよう、会社として全力で取り組んでいく。